

序文

芸術文化学部教育成果に対する 二つの視点

今春3月、富山大学芸術文化学部は最初の卒業生を送り出すことになりました。第1回卒業生114名は平成18年4月に入学して、新学部で各々が専攻する芸術分野について真摯に学び、制作に取り組んできました。そして、その成果が、「GEIBUN 1 - 富山大学芸術文化学部第1回卒業制作展 - 」と題して、高岡市美術館のご協力により広く一般市民に公開し、評価していただくことになりました。

この制作展は芸術文化学部における「教育の最終ステップ」と位置づけられています。そこで、私は2つの視点から展示作品について考えてみたいと思っています。

第1はそれらの成果に地域社会の息吹が感じられるか、という視点です。特に、芸術文化学部は伝統工芸都市・高岡市と旧高岡短期大学をベースに創設され、発展してきたからです。もちろん、このことは地域文化を丸呑みし、無批判に継承することではありません。私は芸術・文化活動は地域社会から隔絶した営みでないと思っています。

第2の視点は完全な成果・作品として捉えないということです。このような視点からすれば、この制作展はあくまでも「大学教育の場として」の最終ステップに過ぎません。作品としての完成度には終わりが無いと思っているからです。作品が不完全であるがゆえに、今後さらに、作り手の創造力を注ぎ込むことができます。「不完全な大作」を見つけられたらと思っています。

私は再編・統合までの約2年間、高岡短期大学に勤務し、新学部の創設に関わった者として、新芸術文化学部が最初の卒業生を送り出すことに対して大変な喜びを感じています。また、今回の卒業制作展のために、公立美術館という「最も相応しい場」を提供して下さった高岡市の高橋正樹市長、並びに高岡市美術館の遠藤幸一館長、そして県民・市民の皆様のご支援に厚くお礼を申し上げます。今後、芸術文化学部の教育・研究・地域貢献の活動に対して忌憚の無いご意見・ご指導を賜りたく存じます。

富山大学長 西頭 徳三